

おたふくかぜワクチンの接種について

◆おたふくかぜの症状・合併症◆

患者の咳やくしゃみなどにより空中に飛び出した、ムンプス(おたふくかぜ)ウイルスを吸い込むことにより感染します。潜伏期間は2~3週間で、軽度の発熱と耳の痛みで始まり、耳の下(耳下腺)のはれが顕著になりますが、その症状は通常5~7日で回復に向かいます。おたふくかぜの合併症としては無菌性髄膜炎、ムンプス難聴、脳炎、睾丸炎(精巣炎)、卵巣炎、睪炎などが報告されています。合併症がおこる頻度は、無菌性髄膜炎(症状としては発熱、頭痛、嘔吐)が約10人に1人、ムンプス難聴が約1,000人に1人、脳炎(症状としては発熱持続、けいれん、意識障害)が5~6,000人に1人と報告されています。思春期頃におたふくかぜにかかった人のうち、数%の人が睾丸炎(症状としては発熱、睾丸腫脹)を合併しますが、男性不妊の原因となることは極めてまれです。

◆免疫◆

おたふくかぜの感染者は小学校低学年や幼稚園の子供たちに多くみられます。一度おたふくかぜにかかった人が耳下腺炎を起こす例も再発性耳下腺炎として報告されていますが、ムンプスウイルスの感染によるという確実な証拠はありません。予防接種を受けた人のほとんどに免疫ができます。しかし、抗体の低下する症例が報告されており、ワクチンの有効率は90%前後ではないかと考えられます。小さい頃におたふくかぜにかかった場合、特徴的な症状を示さない、いわゆる不顕性感染で終わる例もあります。既に抗体のある人にワクチン接種を実施しても問題はなく、免疫は高められます。

◆ワクチンの効果と副反応◆

おたふくかぜワクチンは生ワクチンで、身体の中でワクチンウイルスが増え、抗体ができます。抗体はワクチン接種を受けた90%前後の人にでき、おたふくかぜに対する免疫はワクチン接種2週間からできます。おたふくかぜの潜伏期間にワクチン接種を受けても、特におたふくかぜの症状が重くなるようなことはありません。おたふくかぜワクチン接種後2~3週ごろに、発熱、耳下腺腫れ、嘔吐、咳、鼻汁等の症状があらわれることがあります。これらの症状は通常、数日中に消失します。接種後3週間後に、発熱、頭痛、嘔吐等の症状が見られる無菌性髄膜炎が数千人に1人程度の頻度であらわれることがあります。さらに稀な副反応については、診察の際に直接医師にお問い合わせください。

◆予防接種を受けるときの注意◆

- ①接種時立っていて嘔吐する可能性がありますので、接種前30分は食べたり飲んだりするのは避けましょう。
- ②気温や来院前の運動により体温が37.5℃を越えた場合は、しばらく待って測りなおすことがあります。時間には余裕を持ってご来院ください。
- ③予約票は接種する医師への大切な情報です。よく読んで正確に記入してください。
- ④予防接種を受ける方がご婦人の場合、あらかじめ約1か月間は避妊しておきましょう。

◆予防接種を受けることができない人◆

- ①明らかに発熱がある人(37.5℃を超える人)
- ②重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな人
- ③本剤の成分(カナマイシン、エリスロマイシン(抗生物質)等)により、アナフィラキシーを起こしたことがある人(他の医薬品投与でアナフィラキシーを起こしたことがある人は、接種を受ける前に医師にその旨を伝えて判断を仰いで下さい。)
- ④妊婦又は妊娠の可能性のある人
- ⑤その他、医師が予防接種を受けることが不適当と判断した人

◆予防接種を受けた後の注意◆

- ①おたふくかぜワクチンを受けたあと30分間は、急な副反応が起こることがあります。医療機関にいるなどして、様子を観察し、医師とすぐに連絡をとれるようにしておきましょう。また、ワクチン接種の副反応を正しく判断するために、接種後30分間は飲食(授乳)を控えてください。
- ②接種部位は清潔に保ちましょう。接種当日の入浴は差し支えありませんが、注射した部位をこするようなどはやめましょう。
- ③接種当日はいつも通りの生活をしましょう。激しい運動や大量の飲酒は避けましょう。
- ④万一、高熱やけいれんなどの異常な症状が出た場合は、速やかに医師の診察を受けてください。

